

健康フラガ

平成21年6月号

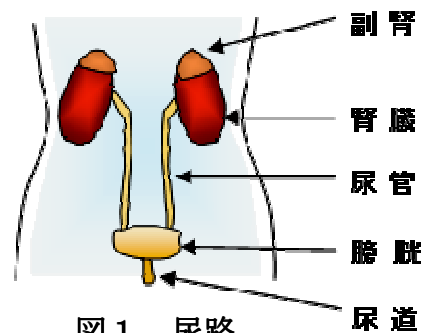
けつにょう じんぞうがん “血尿と腎臓癌”

医療法人将優会 クリニックうしたに
理事長・院長 牛谷義秀

肉眼的に血尿を経験された場合には、驚いて病院を受診されるでしょう。しかし年1回の検診や人間ドッグで血尿を指摘された方もおられると思います。これをどのように考え、解決したらいいのでしょうか？

1. 血尿をおこす病気

血尿は尿ができて排出されるまでに通過する尿路（腎臓～尿管～膀胱～尿道）（図1）のどこに原因があってもおこります。腎結石や尿管結石のほか、腎炎や膀胱炎、尿道炎などの感染症でも肉眼的血尿の原因となります。でも泌尿器科としては恐いのはやはり、尿路の癌ということになります。膀胱癌や腎盂癌（腎臓の中央で尿が集まる場所）・尿管癌ではほとんどの症例で血尿がみられます。腎臓癌でも頻度は高くありませんが、血尿が見られることがあります（図2）。



2. 腎臓に関わる癌の病気

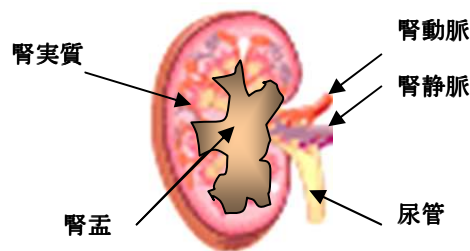
腎臓にできる腫瘍は良性もありますが、そのほとんどが悪性です。成人には腎実質から発生する腎細胞癌と腎盂に発生する腎盂癌があります（図2）。

1) 腎細胞癌

腎細胞癌は10万人に2人位の頻度で発生し、40～50歳に多く見られ、2～3対1の割合で、男性の方がやや多いようです。発生の原因は不明ですが、喫煙や脂肪分の取り過ぎ、カドミウムという化学物質やホルモンとの関係が指摘されています。また血液透析を受けている人が腎臓癌になる確率は通常の人よりも高いといわれています。

2) 腎盂癌

腎盂癌は、尿管や膀胱と一つの臓器として考えた方がわかりやすいでしょう。腎盂癌は、尿の流れてくる道の表面にできます。症状としては膀胱癌のように、血尿が約5人に4人の割合で現れます。この際の血尿は、尿の全部が赤くなるのが特徴です。



3. 腎臓癌の診断

腎臓癌の3大症状は、まず第一は血尿、第二は腎臓腫大（腫瘍として触れる）、第三はこの腫瘍が痛む「腎臓の痛み」といわれていますが、やはり血尿がもっとも重要です。この3大症

状が出る時には、かなり病気が進行した状態と考えられます。また腎臓癌が進行した場合、腎臓以外の症状として貧血、体重減少、発熱などが見られ、これらの症状がきっかけとなって腎臓癌が発見されることがあります。また腎臓癌は骨や肺、肝臓、脳などに転移しやすいため、転移先で起こる症状から発見されることもあります。

4. 腎臓癌の診断方法(図3)

以前は、造影剤を注射して尿が流れている状態を見る「排泄性腎盂造影検査」が行われ、尿の流れや腎臓の形の変化などで判断していた時期がありました。現在では手軽に行える超音波検査（エコー検査）やCT（コンピュータ断層撮影検査）が発達したため、症状がなくても検診や人間ドッグで比較的早期の段階で発見できるようになりました。さらに詳しい検査が必要になった場合には血管造影が決め手になることがあります。

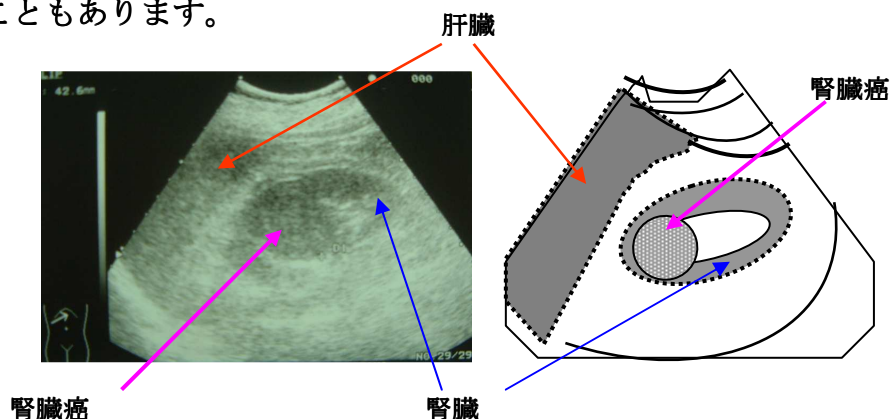


図3-1 腎癌のエコー図

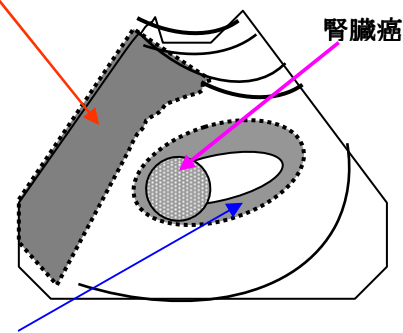


図3-2 腎癌のシェーマ

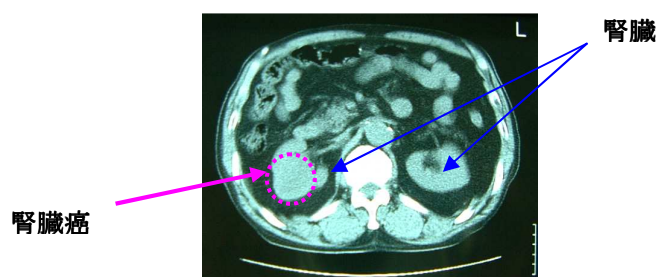


図3-3 腎癌のCT (同じ症例)

5. 腎臓癌の転移

腎臓癌では、癌細胞が血液に入って肺に移転してしまいがちです。肺にできた転移が先に見つかって、原発の腎臓癌が後で見つかることもあります。肺のほかに、癌が骨に転移し、骨の痛みで整形外科を受診し、いろいろ調べた結果、腎臓癌が原因だったということもあります。

6. 治療法

1) 腎臓癌

まず第一に「根治的腎摘出術^{こんちてきじんてきしゅつじゅつ}」という手術をするのが一般的です。これは、副腎や腎臓周辺を含めて、腎臓を摘出する手術です。またインターフェロンを使った免疫療法、抗癌剤を使った化学療法、放射線療法、ホルモン療法も行われます。

2) 腎盂癌 1

腎盂尿管の摘出と膀胱の一部を切除する手術を行いません。また、補助療法として手術後に放射線療法や抗癌剤を併用した化学療法を行いません。

7. まとめ

いろいろな検査を行っても、どうしても血尿の原因がはっきりしない方がおられます。その場合は定期的に通院していただき、癌病変が発生していないかなど、注意深く観察していただく必要があります。